

# ボランティア活動を生かした 心の教育の意義と課題

—中学・高校における実践事例を中心として—

高 賢 一

## はじめに

心の教育が叫ばれて久しいが、今、なぜ改めて心の教育が問われているかについては答えを出すまでもない。学校においては、これまで心の教育が十分ではなかったという指摘もあるが、何らかの形で心の教育の実践はみられたものの、十分な成果が上がらなかったというのが実情ではないだろうか。現行の学習指導要領は、本来豊かな体験を通して児童・生徒の人間形成を図ることを意図して作成されたはずである。しかし、現実には受験競争に伴う知識の詰め込み教育、都市化・過疎化の進行、核家族化、少子化、物質的豊かさ等が先行あるいは優先されたために、子どもの生活体験が不足し、人間関係の希薄化が進行するなど、子どもを取り巻く生活環境が大きく変化した。

このような情勢の中、体験活動を重視することによって、子どもが主体的に生きる力を身につけることができるように、学校においては、教科の学習をはじめ全ての教育活動に取り組むことが重要な課題となっている。体験活動の宝庫ともいえる学校行事を通して得た喜びや充実感等が、教科の学習や学校外での自主的な活動に対する興味・関心を高めることになる。今日、体験活動の教育的意義が再確認され、学校における教育活動、とりわけボランティア活動の重要性が叫ばれている。筆者は、これまで教育相談、学習（倫理）指導、ボランティア活動の三つの視点から心の教育を検討してきた。

本稿では、研究実践例の分析や筆者の勤務校におけるJRC部の顧問体験やボランティア体験等を踏まえながら、体験活動の一環としてのボランティア活動の意義を明らかにするとともに、ボランティア活動を生かした心の教育の実践事例について<sup>(1)</sup>

---

たか・けんいち/石川県立輪島高等学校

キーワード/生きる力、体験活動、豊かな人間性の育成

て検討する。なお、学校におけるボランティア活動の具体的な進め方等については、別の機会に検討したい。

## I 心の教育のとらえかた

心の教育は、人間の精神の育成にかかわる教育であり、いかに生きるかを基本とした意志力の教育といえるが、学校現場において心の教育をどのようにとらえ、どのような方法で実践するかについて模索されている。なお、筆者は、心の教育に対する識者の見解や研究実践等について、日本学校教育学会第13回研究大会<sup>(2)</sup>において研究発表を試みたが、改めて整理してみたい。

まず、中央教育審議会の第2次答申においては、子どもたちに「生きる力」を育むことをめざして、子どもたちの個性尊重を基本としながら、「生きる力」の核となる豊かな人間性を指摘している。①美しいものや自然に感動する心などの柔らかい感性、②正義感や公正さを重んじる心、③生命を大切にし、人権を尊重する心など基本的な倫理観、④他人を思いやる心や社会貢献の精神、⑤自立心、自己抑制力、責任感、⑥他者との共生や異質なものへの寛容、の六つである。

心の教育の可能性に関する識者の見解は分かれるが、本稿では心の教育は可能であることを前提としながら論究する。宇井治郎は、心の教育を次のようにとらえている。今、ここで「心」とは何かを自問してみても、幅広く多様な観点からとらえる必要があり、納得のいく答えを用意することはできないとしながらも、生徒指導上の課題を吟味したうえで、重視したい心を4つ指摘している。

1番目は、「自分自身を見つめる心」である。自分自身を振り返り、自己を見つめる心が、その人に固有な生きる力を生み出すからである。2番目は、「相手を思いやる心」である。思いやりの心は、知的に学んで理解しただけでは実践する力にはなりにくい。相手の気持ちや心の動きは、自分の体験と重ね合わせて真の理解となる。3番目は、「いのちを大切に作る心」である。どんなに感情が激昂しても、「人間を傷つけることは絶対に許されない」という人間存在の根源に関わる価値意識を育てる必要がある。4番目は、「集団や社会に尽くそうとする心」である。人間は一人では生きられないことへの理解を深め、社会や他者に役立つ<sup>(3)</sup>とする社会的・道徳的な価値意識を育てることが強く求められているからである。

一方、梶田叡一は、心の教育を次のようにとらえている。「心」ということでいわれる感性や共感性、気持ちの動きや思考の動き、さらには責任感等々は、基本的には自ら形成されていくものであって、外から教え込んでもどうにもならないという面がある。親や教師が、最後まで責任を持って子どもの心を育てていけるものではなく、子ども自身が自分の責任と努力で自己を育て、自己を形成していかなければなら

ない。しかし、子どもが自己を育成し、形成するうえでの場の設定やきっかけづくりなどは、親や教師が支援する必要がある。

加えて、支援するうえでの課題として、①美しいもの、感動的なものとの出会い、②固定概念・既成概念へのゆさぶり、③課題研究や読書等への没頭、④安易に迎合・同調しない姿勢の習慣づけ、⑤異質な感覚や発想に気づき、相互に尊重し合う話し合い、⑥自分の活動や気づきの振り返りや自己評価、⑦自分の実感・納得・本音の世界の探究、⑧困難で嫌なことから逃げないで、真っ向から取り組む対処的姿勢の習慣づけ、の8点をあげている<sup>(4)</sup>。

宇井は、最近の中学生や高校生の引き起こす凶悪事件は、人間らしく生きるための心が耕されていないことを指摘しているが、「生きる力」の土台となる「心の教育」の「心」を具体的に提示しているところに特徴がある。梶田は、子どもの「心」を教育するのではなく、子どもの自己育成や自己形成を支援するのが学校や家庭の役割であると指摘している。子どもの自主性や主体性を奪ってきた学校や家庭の在り方を問い直しているともいえよう。物が豊かで便利な生活は、子どもたちに他律的・依存的な生活態度を形成させ、子どもたちが直接かかわる体験的な活動を奪ってきた実態がある。現実の子どもたちが育つ環境に目を向けるとき、学校が何をなすべきか、何ができるかを問い直す必要があるといえるが、その点で宇井や梶田の指摘は示唆に富んでいると思われる。

このように、心の教育については百花繚乱の状況を呈しているが、学校現場においては、それぞれの学校や子どもの実態など、さまざまな要因が絡み、心の教育のとらえ方や実践方法に違いがみられるのは当然であろう。中央教育審議会の答申においては、心の教育を進めるうえでの手だてや環境づくり等が提示されているものの、心の教育そのものに関する明確な定義は見当たらない。ただし、「生きる力」についての定義、さらに「生きる力」の核となる豊かな人間性に関する定義がみられる。心の教育における「心」は、後者の定義の中に示唆されていると筆者はとらえている。つまり、①美しいものや自然に感動する心などの柔らかな感性、②正義感や公正さを重んじる心、③生命を大切に、人権を尊重する心など基本的な倫理観、④他人を思いやる心や社会貢献の精神、⑤自立心、自己抑制力、責任感、⑥他者との共生や異質なものへの寛容、の6つである。

宇井が重視する4つの心は具体的で説得力があり、梶田が指摘する子ども自身による自己育成や自己形成も重要である。中教審が提示する「生きる力」の核となる6つの豊かな人間性は、宇井や梶田の指摘を包摂・整理するものと筆者はとらえている。そこで、少なくとも学校においては「心」の教育をどのように実践するかということが大きな課題となる。現行の学校教育の枠組みの中で心の教育を実践する場合、学習指導要領に記されている各教科等の目標と内容を心の教育の視点で確認

し、それを用いることが基本となる。したがって、抽象的表現の多い学習指導要領の記述を子どもの具体的な生活レベルの事実にもどし、それを教師が共通の課題として認識する必要があるだろう。

ここで重要なのは、子どもの「心」を一方向的に教育するのではなく、子どもの主体性や自主性を奪ってきた家庭や地域社会、あるいはこれまでの学校教育の在り方についても再検討する必要があるという点であろう。今日の閉塞した社会や学校において、どのようにして子どもの自主性や主体性を取り戻すべきか、いくつかの有効なアプローチの一つとして「体験活動」が重要視されている。心の教育は、学校はもちろんのこと、家庭や地域社会、さらに社会全体で取り組むべきものであるが、大人社会のモラル低下や社会秩序の乱れ等が指摘される中で、子どもたちにどんな心の教育ができるのか疑問視する声も少なくない。

## Ⅱ 体験活動としてのボランティア活動の意義

第15期中央教育審議会の答申では、いかに社会が変化しようとも主体的に「生きる力」を身につける教育を実現する必要があるとしている。加えて、①自分で課題を見つけ、自らより良く問題を解決する力、②他人を思いやる心や感動する心などの豊かな人間性、③健康や体力、を「生きる力」であるとして、これらをバランスよく育てていくことが重要である、と指摘している<sup>(5)</sup>。そうした「生きる力」を育成するためには、学校における自然体験、勤労体験、ボランティア活動などの体験活動をいかに有意義なものにするかが問われているが、体験活動は、ただ単に体験の機会を与えさえすればよいというものでもない。

例えば、勤労体験活動として学校でお米づくりなどが行われるが、1回目の活動で田植えをして、2回目で稲刈りをし、3回目で収穫したお米を給食のご飯にしたり、餅米をついてお餅にして食べることなどは、ほんとうの「生きる」体験活動といえるだろうか。田植えや稲刈りなどを経験した子どもが少ないか皆無に等しいとすれば、そうした経験自体が立派な生活体験といえるかもしれないが、お膳立てができたうえでの体験は、「生きる」体験活動とはならないであろう。施肥、水の管理、除草、農薬散布などを他人に任せて、育った稲を子どもの手で刈り取るという体験には生活の連続性がない。生活の連続性を持たせることは時間的にも物理的にも容易ではないが、テレビやビデオなど、何らかの方法で生活の連続性を補ってこそ生きる体験となりうるのではなかろうか。

ところで、数ある体験活動のなかで、今日とくにボランティア活動が重視されるのはなぜだろうか。物質的に豊かな生活に生まれ育つと、何となく楽をして生きてゆけるような錯覚にとらわれることがある。その結果、今日の子どもたちには、積

極的にたくましく生きようとする力の欠けた無気力、自分さえよければ他人は誰でもよいといった無関心、自分の属している集団や共同体の中で果たそうとしない無責任、美しいものや気高いものに触れても心が動かない無感動、日常の基本的な生活習慣さえ身につけていない無作法、自分が人間としていかに生きるべきかについて自覚しない無自覚などがみられる。こうした憂慮すべき状況を克服するために、自発性、無償性、公共性、先駆性あるいは創造性といった条件を備えたボランティア活動が重要視されている。

坂本昇一は、体験活動の基本的な考え方について、「体験活動の本体は、『生きる』体験である。『生きる』ということは、生活のすべてを自分で行うこと、そして、それを自分で考えて、決めて実行することである。とうぜん、『生きること』は、他人と自分を『かかわらせる』ことである。この『かかわる』ことが体験の本質になる。これが経験と違うところである。自然とかかわる自然体験、人とかわるボランティア体験が今求められている」と述べている<sup>(6)</sup>。

流出重油の回収ボランティア活動に参加した本校生徒の多くは、自分が社会や他の人々、あるいは自然によって生かされていることを知ったとき、はじめて自分を生かすことができることに気づいたようである。坂本の指摘や重油回収ボランティア活動に実際に参加した生徒の反応などから、体験活動においては自然と自分をかわらせること、人と自分をかわらせること、社会と自分をかわらせることが重要なポイントになっていることが看取できる。

### Ⅲ ボランティア活動を生かした心の教育の実践事例

ボランティア活動を生かした心の教育を論究するうえで、生徒会を中心とした盛岡市立厨川中学校におけるボランティア活動とJRC（青少年赤十字）部を中心とした本校のボランティア活動の実践事例を考察したい。

#### 1 盛岡市立厨川中学校におけるボランティア活動

盛岡市立厨川中学校の箱石順一郎教諭は、生徒会活動を中心に心の交流をめざした当校のボランティア活動を報告している<sup>(8)</sup>。ボランティア活動のねらいと位置づけは次の3点である。

1点目は、教育目標および望ましい生徒像として、「心豊かに、進んで奉仕に努める生徒」を掲げ、その具現化のために、奉仕的体験を通して内面に根ざした積極性、主体性、他人に対する思いやりの心などを培うことである。2点目は、社会的有用感をもたせ、人間としての在り方生き方を考えさせるために、奉仕的活動の発表機会や賞揚の場を積極的に設け、実践意欲を高め、豊かな心の育成を図っていくこと

である。3点目は、生徒の自発的・自主的な活動こそがねらいを保障するという考え方から、生徒会活動を軸に指導・援助を行い、集团的・ダイナミックな取り組みにより感動や感性を高め、豊かな人間性を形成することである。

生徒会を中心としたボランティア活動の柱は、大きく次の3つである。1つ目の柱は、フィリピン救済募金活動を発展させたスカラシップ募金<sup>(9)</sup>、フィリピンの子どもたちが学習することができる施設の建設など、フィリピン関係の活動である。2つ目の柱は、障害者施設への協力援助活動や地域老人クラブとの交流活動など、地域ボランティア活動である。3つ目の柱は、特殊教育学級との交流学习である。

当校では、フィリピンで発生した大地震に対する生徒会執行部による救済募金活動を契機として、ボランティア活動がスタートしている。こうした募金活動に対して、フィリピン最大のボランティア団体からの感謝状ならびに国旗を届けてくれた盛岡福祉バンクの職員、マニラで貧困に苦しむ人々の救済に尽力している神父が来校し、感謝の言葉と感動的な講演が全校生徒に喜びと誇りを与えている。そのことが契機となり、フィリピンに対するボランティア活動がさらに深まり、フィリピンの学校との姉妹校締結が実現し、生徒会執行部6人が姉妹校との交流に現地を訪問している。このように、子どもたちの感動と喜びがボランティア活動をより広め、そして深める原動力となっている。平成3年からの数年間、生徒会活動の中心的活動としてボランティア活動に取り組んできたが、単なる活動だけで終わるのではなく、活動を通して、人間としての在り方生き方につながる「心」の問題として考えようとする姿勢が子どもたちに育ったことが報告されている。

箱石教諭は、このような教育活動が展開できた要因として、①ボランティア活動に対して、強い目的意識を明確にもって取り組めるようになったこと、②努力した成果を実感できたこと、③さまざまな人々と出会い、多くの感動体験ができたこと、④周囲から適切な評価を受け、自信と誇りをもったこと、⑤一人ひとりが社会的有用感をもったこと、⑥ボランティア活動を成し遂げた成果とその感動を共有することにより、連帯感と意欲を高めることができたこと、をあげている。

加えて、今後の課題として、①当校のボランティア活動を支えてきた考え方や活動の流れが立ち消えないようにすること、②そのためには、教職員が常に「何のための活動か」という目的や意識を生徒に吟味させながら、ボランティア活動の本質を見据え、生徒が継続的に取り組めるように支援していく必要性を指摘している。

## 2 石川県立輪島高校におけるボランティア活動

平成3年4月、本校が「石川県ボランティア活動普及推進協力校」に指定されたことに伴い、奉仕活動を主体とするJRC（青少年赤十字）部が発足し、筆者が顧問に就任した。JRC部の活動は、文化系部活動の一環として行われるものである

が、活動のねらいとして、①奉仕的活動を通して、生徒の内面に根ざした自発性や公共性、思いやりの心を発掘する、②人間としての在り方生き方を考えさせるために、社会的有用感や実践意欲を高め、感謝の心や奉仕の心など、豊かな心の育成をはかる、を掲げた。ボランティア活動普及事業協力校に指定されたことに伴うJRC部の発足であり、スタートの動機は消極的であったが、予想に反してボランティア活動に関心のある生徒が次々と部員として集まり、そうした生徒の意欲・創意・工夫により、活動の輪が広がっていった。発足以来、先進実践校の活動を参考にしつつ、公衆トイレの清掃活動や環境美化運動、各種募金活動、老人福祉施設への慰問など、さまざまなボランティア活動に挑戦した。

牛乳パックリサイクル運動、使用済みテレカ回収運動、献血運動など、全校生徒を巻き込んだ活動にも工夫を重ねた。進学校としての本校に馴染まなかったボランティア活動に対して批判的な目もあったが、心の教育を重視する学校長の理解と協力に支えられた。文化祭では、熱意ある部長の発想で「JRCカレー」なるメニューで模擬店を開いたところ好評を博し、その収益金の一部がユニセフ募金に充てられるというエピソードもあった。ボランティア活動に関する情報提供などを目的とした「JRCだより」の発行、あるいはJRC部のボランティア活動に対する情熱に動かされ、進学目標達成を至上命題としてきた教職員や生徒の価値観に広がりが見られるようになった。生徒の体験日誌や作文等に目を通すと、「思いやりの心」や「奉仕の心」など、学習や成績のほかにもっと大切なものがあること、つまり心の問題にも目を向ける生徒が増えてきたことが看取できる。

平成9年1月早々、ロシアタンカー「ナホトカ号」からの重油流出事故が発生し、日本海側の海岸、とりわけ若狭湾や加賀海岸、能登外浦海岸（能登半島国定公園）などに重油が漂着するという惨事に直面し、福井県民や石川県民は大きな衝撃を受けた。しかし、県内はもちろんのこと、全国各地から参集した多くのボランティアが重油の回収作業に取り組んだ。

筆者の勤務校においても、このような事態を憂慮し、JRC部が中心となって、教職員の有志や校内の希望生徒とともに重油回収ボランティア活動に参加した。自らの意志で重油回収ボランティアに参加した生徒は延べ70人であったが、実際に参加した生徒は約50名である。この活動は、平成9年1月中旬から2月上旬にかけての週末（土曜か日曜、午前か午後の3時間）に実施されたが、合計3回にわたるボランティア活動に3回とも参加した生徒もいれば、2回あるいは1回のみ参加した生徒もいる。参加回数に関係なく、こうした活動に1回でも参加した生徒50名に対して事後のアンケート調査を実施したが、アンケートの内容および結果は以下のとおりである。

1. 重油回収ボランティアに参加した理由は何ですか？（複数回答可）

- ①少しでもきれいにしたいから（40人）、②少しでも役に立ちたいから（34人）、  
③多くの人達と一緒にボランティア活動をしたかったから（28人）、④友達に誘われたから（11人）、⑤何となく（5人）、⑥その他（暇だったから1人）

2. 参加して良かったと思いますか？

- ①良かった（47人）、②後悔している（2人）、③わからない（1人）

3. 参加してどんなことを感じましたか？

- ①自然破壊の現実を実感した（45人）、②ボランティア活動に参加しているという実感がわいた（46人）、③参加している人々の姿に感動した（32人）、④自分が役にたっているという実感がわいた（38人）、⑤自然の美しさのありがたみを感じた（35人）、⑥ただ疲れただけで何も感じなかった（7人）、⑦その他（最初はやる気十分だったが、疲れてくると事故をおこしたタンカーに腹が立ってきた／これだけ海が汚染されると、能登観光に相当なダメージを与えと思った）

4. ボランティアに参加して得られたものは何ですか？

- ①自然を大切に思う心（43人）、②郷土を愛する心（40人）、③人々が協力することの大切さ（38人）、④自分が役に立っているという実感（34人）、⑤ボランティア活動の大切さ（38人）、⑥ボランティア活動をした後のすがすがしさ（31人）、⑦その他（学校の勉強では得られないもの／小さな力が大きな力になること／遠くから参加したボランティアの人々に対する感謝の気持ち等／石川県にはボランティア活動は根づかないといわれたが、そうでないことがわかった）

5. もし、このような事故が再び発生したら、参加しますか？

- ①参加したい（45人）、②参加したくない（1人）、③わからない（4人）

アンケートの結果から、恵まれた自然環境の中で生活してきたことに対する感謝の気持ち、身近な自然を保全することの重要性などを再認識する生徒が多かったことが明らかになった。さらに、美しい自然に対する畏敬の念、ボランティアに参加した他の人々に対する感謝の心、郷土を愛する心、自然と共生することの意義などを強く意識したことが看取できよう。生徒とともにボランティア活動を進めるにつれて、全国に誇る美しい海岸が汚染されたことに対する怒りや絶望感、全国から参集したボランティアの人々に対する驚きや感謝の気持ちなどが錯綜し、目に涙を浮かべる生徒も少なくなかった。

愛する郷土の海岸が汚染されるという信じがたい現実と直面したものの、こうした活動を通して、ボランティア活動の重要な精神とされている自発性、無償性、公共性、創造性などが培われたものと思われる。その後、活動の輪を広げようというムードが高まり、学校における心の教育の一環として、全校生徒が重油回収ボラン



ティア活動に取り組む計画が立案されたが、予定より早く回収作業の終息宣言が出されたために、この計画を実行するには至らなかった。しかしながら、この計画の実施にあたり、JRC部は、全校生徒や教職員を対象にした事前学習の役割の一端を担うことになり、ボランティア活動の指導性を発揮した。環境汚染という不幸な出来事ではあったものの、ボランティア活動の本質に触れる貴重な体験であった。

現在、JRC部がとくに力をいれているのは、毎週月曜日と木曜日の放課後に実施している市内老人福祉施設でのボランティア活動である。活動時間帯の関係により、お年寄りの話し相手や食事の介護補助など、入居している老人に接する機会は乏しいものの、主として苑内レクリエーションや各種行事に伴う装飾等の企画・運営・実施についての補助的活動を行っている。本校から施設まで徒歩で約30分くらい要するが、雨の日も、風の日も、そして雪の日も施設まで直接自分の足を運ぶことによって、ボランティア活動の精神あるいは条件の1つである「自発性」を培うことができる。約15名ばかりの部員が施設での奉仕活動に取り組んでいるが、2年前からこうした精神を厳格に受け継いでいる。福祉施設での奉仕活動は、重油回収ボランティア活動に比べると地道な活動かもしれないが、「お年寄りが喜ぶ姿」を肌で感じとりながら、「少しでも役にたっている」という社会的有用感を身につけている点で、この活動の意義は大きいと思われる。

なお、平成3年4月に創部されたJRC部の活動が評価され、次のような感謝状や功労賞を受賞している。

平成5年3月、能登鉄道株式会社より、輪島駅構内の公衆トイレなどの清掃美化奉仕活動に対して感謝状を授状。同8年8月、テレビ金沢株式会社より、24時間テレビ募金活動に対して感謝状を授状。同9年11月、石川県知事より、老人福祉施設での奉仕活動に対して「石川県青少年ボランティア賞」を受賞。同9年12月、輪島警察署より、交通事故防止に関する協力奉仕活動に対して感謝状を授状。同10年11月、日本青少年研究所より、これまで取り組んできた奉仕活動に対して「いきいき活動優秀活動賞」を受賞。同10年12月、北陸中日新聞社会事業団より、過去および現在のボランティア活動に対して「中日あおば賞」を受賞。

上述のように、2つの実践事例を検討してみたが、いずれの学校においても、体験活動の1つであるボランティア活動と心の教育に関連性があることが看取できよう。厨川中学校においては生徒会が中心となって、輪島高校においてはJRC部が中心となってボランティア活動に取り組んでいる。いずれも最初は一部の生徒を中心とした活動であったが、生徒会執行部あるいは部員の熱意などにより、全校に活動の輪が広がっている。体験活動の一環としてのボランティア活動に終わるのではなく、活動を通して人間としての在り方生き方につながる「心」の問題を考えようとする姿勢も生徒に育ったものと思われる。

#### IV 今後の課題と展望

横山利弘は、学校で心の教育を充実させるためには、学校全体に心に視点を当てた教育観の共有が必要であること、さらに、日常生活において実践できる道德性を育むためには、①学校教育に多様な実践体験活動を取り入れること、②家庭および地域社会との連携を図ること、の2つを指摘している<sup>(10)</sup>。横山が指摘するように、心の教育を充実させるためには多様な実践活動を取り入れることが重要であり、直接体験の機会が乏しくなっている多くの子どもたちにとって、ボランティア活動体験は、人間としてのかけがえのない自分自身の生き方についての自覚を深めるうえで貴重な機会となるであろう。ボランティア活動の具体的な進め方については、他の実践例や文献等に譲ることとするが、ボランティア活動体験を生かした心の教育を進めるうえで留意すべき課題がある。

1点目は、自発性を重視するボランティア活動ではあるが、子どもたちに「役に立ちたい」という意識があるかという問題である。平成11年6月上旬、本校（輪島高校）の新生（160名）を対象に、ボランティア活動に関するアンケート調査を実施した。その結果から、約8割の生徒に「ボランティア活動をさせられた」という意識が強いことが明らかになった。本校だけの傾向とは思われないが、ボランティア活動の輪を広めたり、深めたりする場合、あるいはボランティア活動を通して人間としての在り方生き方の問題を考えさせる場合、こうした「させられた」という意識から、いかに「自ら進んでやっている」「何かの役に立ちたい」という自発性や社会的有用感を持たせるかが重要な課題となろう。

2点目は、心の教育を進めるにあたって、学校に多様な体験活動を取り入れることに異論はないが、かつて批判された「這いまわる経験主義教育」に陥らないように留意することが大切である。経験主義教育に間違いがあったのではなく、経験のプロセスを無視して、単に経験活動をさせただけになった点に間違いがあったといわれている。こうした状況に陥らないためには、子どもたちが経験で得たものを振り返り、それを価値へと抽象化して内面的な自覚に至るように支援する必要がある。

3点目は、ボランティア活動の評価に関する問題である。この問題に関しては識者の見解が分かれるところであるが、本校においても今後検討を要する課題である。

評価必要論としては、①ボランティア活動者が、自分自身の活動をより良くすることを目的としたもの、②ボランティア活動を社会的に広く推奨することを目的としたもの、に大別できよう。論議の的となるのは後者の社会的推奨の立場であるが、子どもたちが、将来の市民としてボランティア活動者になりうる契機づくりとして、ボランティア学習を学校でどのように具現化できるかが問われている。子どもたち

の活動や体験を優劣や序列で決めつけるのではなく、きっかけとして学んだことを認める評価が必要であり、その充実のために自己評価の工夫が求められている。

筆者は、平成11年8月6日～7日に上越教育大学で開催された日本学校教育学会第14回大会において、「実践者から学ぶボランティア活動」というテーマで研究発表を試みた。平成11年6月上旬、本校の新入生全員（4クラス160人）を対象にボランティア活動に関するアンケート調査を実施したところ、新入生の約85%が、小学校や中学校において何らかの形でボランティア活動を経験していることが判明した。さらに、ボランティア活動に対しては肯定的なイメージ（自発性や無償性等）が強いものの、実際にボランティア活動をやってみた感想としては、「させられた」あるいは「きつい」などという印象が強いことが判明した。肯定的なイメージと消極的あるいは否定的な感想、この2つのギャップをどのようにとらえ、どのように縮めていくかが大きな課題として浮上した。

そこで、平成11年6月下旬、新入生全員を対象とした倫理の授業において、ボランティア活動の意義や精神、進め方など、ボランティア活動に関する基礎学習を行い、そのうえでボランティア活動の意義や精神に肉迫する小学生の体験発表文を活用したところ、生徒の反響が予想外に大きかった。授業後のアンケートでは、「ボランティア活動に対するイメージが大きく変わった」が全体の約64%、あるいは「構えることなく、身近なところからボランティア活動をやってみよう」と回答した生徒は105人、授業前の73人に比べると32人増加していることが判明した。小学校や中学校においては、体験重視のあまり一般的にボランティア活動の意義や精神、進め方等についての基礎的な知識や学習が不足したまま、老人福祉施設を訪問したり、重油回収ボランティア活動などに取り組む子どもたちが多いため、ボランティア活動に対する誤解や偏見、消極的な感想等を持ちやすいのではなからうか。

高等学校においては、小学校や中学校時代に感じたボランティア活動に対する消極的な感想やイメージをいかに積極的なものに変えられるかによって、一部の生徒が行うボランティア活動をできるだけ多くの生徒が参加するボランティア活動に発展させることができるか否かが決まるといっても過言ではない。そのためには、ボランティア活動に対する事前学習や動機づけが不可欠であろう。なお、上述の小学生の体験発表文は、本校1年生のボランティア活動に対するイメージを変化させたり、ボランティア活動への意欲を喚起するなど、生徒の心をゆさぶる効果がみられたことから、いわゆる進学校ではない普通科高校や職業科高校にもアンケート調査を依頼し、こうした小学生の体験発表文の効用性について検討中である。

#### 【註】

- (1) 平成3年4月にJRC（青少年赤十字）部が発足し、筆者が顧問に就任したものの、それま

でJRC部の顧問経験はなく、暗中模索の状態スタートした。しかし、ボランティア活動に強い関心を示す生徒が入部し積極的に取り組んだため、ボランティア活動を「やらされている」という消極的な雰囲気にはならなかった。

当部の顧問としては、指導的な立場というよりも、生徒とともに活動する姿勢を大切にした。平成6年4月から同8年3月まで上越教育大学大学院に留学した2年間を除いて、現在も当部の顧問を担当している。6年間にわたってJRC部の顧問を担当してきたが、この間、ボランティア活動を通して成長していった生徒を見守ってきた。JRC部に入部した生徒の多くは、福祉関係、医療関係、教育関係等の上級学校に進学したり、そうした関係の仕事に就いている卒業生が多い。

- (2) 平成10年8月1日(土)から2日(日)の2日間にかけて、埼玉短期大学において当学会第13回大会が開催されたが、「学校における心の教育に関する研究」というテーマで自由研究発表を行った。筆者の発表に関する質疑が多く、戸惑うことも多かったが、会員が共有できる研究に発展させて欲しいという要望があり、本稿では、ボランティア活動の視点から心の教育を検討することにした。
- (3) 宇井治郎「生きる力の中核として心をどうとらえるか」尾木和英編『Q&A「心の教育」をめざす学校教育』教育開発研究所、1998年、pp.16-19。
- (4) 梶田毅一「感性と共感性を育てるために」学事出版編『月刊高校教育11月号』1997年、pp.20-23。
- (5) 平成9年6月、「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について」と題した中央教育審議会第2次答申、同10年3月、その中間報告が発表された。さらに、同年6月、3月に公表された中間報告の追加が発表された。
- (6) 坂本昇一「今求められている体験活動とはどのようなものか」宮川八岐編『体験・ボランティア活動の考え方・進め方』教育開発研究所、1997年、pp.8-9。
- (7) JRCは、Junior Red Cross(青少年赤十字)の頭文字をとった略字であるが、国際赤十字社の流れをくむものである。
- (8) 箱石順一郎「心の交流をめざしたボランティア活動」宮川八岐編『体験・ボランティア活動の考え方・進め方』教育開発研究所、1997年、pp.162-166。
- (9) 年間15,000円を負担することで、現地の子ども1人の就学を援助する制度である。1年間に要する学費と、子どもが1年間に街頭で稼ぐと予想される金額の合計が15,000円くらいになるという試算である。
- (10) 横山弘利「心の教育を学校教育でどのように充実をはかるか」尾木和英編『Q&A「心の教育」をめざす学校教育』教育開発研究所、1998年、pp.25-28。